

農作物生産情報 (令和3年6月)

気象

(令和3年5月20日 仙台管区気象台発表 東北地方1か月予報より)

天気は数日の周期で変わりますが、平年に比べ晴れの日が少なく、日照時間が平年並み～少なくなる見込みです。向こう1か月の平均気温は、高い確率60%です。

水稲

きめ細かな水管理で生育促進に努めよう！

1 水管理

分けつ(茎数の増加)の適水温は、日最高で30~32℃、日最低で15~17℃、日較差15℃前後である。

日平均水温が19℃以下になると分けつの発生が少なくなるため、昼間止水・夜間かんがいを基本とし、暖かい日は浅水で水温を上昇させ、寒い日は葉先が冠水しない程度のやや深水で保温する。また、漏水防止に努め、掛け流しはしない。

有効茎数(1株茎数で「青天の霹靂」は18本程度、その他の品種は20本程度)を確保した水田では、6月末頃から高温(平均気温が20℃以上)で晴天が続くようであれば中干しを行う。中干しは田面に軽く亀裂が入る程度とする。

■ 水管理の目安

生育期	暖かい日	寒い日
分けつ期	3cm程度の浅水	5~6cm程度の深水
有効茎数確保後	中干し	5~6cm程度の深水

2 雑草防除

(1) 初期+中期の体系処理の場合

初期剤使用後20日頃を目安に中期剤を散布する。

除草剤の散布後は、除草効果の維持と水質汚染防止のため、散布後7日間は止水し、落水や掛け流しをしない。

(2) 一発剤を使用し、残草が見られた場合

残った草種に応じて除草剤を散布する。除草剤は使用基準を必ず守り、他の作物に飛散しないように注意する。

■ 残った草種別に使用できる除草剤の例

- ア 広葉雑草(アゼナ・ホタルイ等)のみ → バサグラン液剤・粒剤
イ ノビエのみ → クリンチャー1キロ粒剤・EW
又はヒエクリーン1キロ粒剤
又はワンステージ1キロ粒剤
ウ 広葉雑草 + ノビエ → クリンチャーバスME液剤

3 病害虫防除

(1) イネミズゾウムシ

移植前や移植時に防除をしなかった場合は、発生に応じて防除し、発生が多い場合は、6月上旬に水面施用剤を散布する。この時期の防除でイネドロオウムシも防除できる。

(2) 斑点米カメムシ類

カメムシの発生源となっている水田周辺の休耕田や、カメムシを誘引する畦畔の雑草（主にイネ科雑草）は、開花・結実する前に刈り取る。また、雑草の刈取りは水稻の出穂2週間前（7月中旬頃）までに終了する。

(3) 葉いもち

取り置き苗は、葉いもちの発生源となるので、補植が終わったら、直ちに処分する。

葉いもちは、早い年には6月下旬に発生がみられるので、ほ場をこまめにチェックし、病斑が見られた場合には、航空防除まで待つのではなく、直ちに防除する。

復元田や、いもち病に弱い品種を作付けした場合は、葉いもちの発生が見られなくても、水面施用剤による予防防除を必ず行う。

水面施用剤（オリゼメートを含む水面施用剤、オリブライトを含む水面施用剤、ブイゲット粒剤）は、6月20日前後から6月末まで（中干し1週間前を目安）に湛水のまま施用する。施用後1週間は止水し、落水、掛け流しをしない。その間の入水は、水尻を止めたままで行う。

※「青天の霹靂」は、農薬の成分使用回数を地域慣行の1/2以内とすることが必須なので、農薬の使用に際しては成分数を確認する。

畑 作

大豆の雑草防除と中耕・培土をしっかりと行おう！
小麦の赤かび病の適期防除に努めよう！

◆大 豆◆

1 は 種

砕土が粗いと発芽率が劣るので、砕土はていねいに行う。

は種量は「おおすず」で7kg/10aを基準とする。

は種直後の多雨は、出芽や初期生育の不良を招くので、気象情報に注意しながら作業する。

は種作業は6月10日頃までに終えるようにする。やむを得ず、は種が遅れる場合は畦幅や株間を詰めて、は種量を増やす。

2 雑草対策

(1) 土壌処理剤

土壌処理剤は、ほ場表面の水分が低いと効果が劣るので、は種後速やかな散布が望ましい。また、出芽した雑草には効果がないので注意する。

(2) 茎葉処理剤

イネ科雑草用の茎葉処理剤は、薬剤により効果が異なるので発生状況に合わせて選択し、効果的に使用する。

広葉雑草に使用できる茎葉処理薬剤は大豆バサグラン液剤とアタックショット乳剤がある。両剤とも「薬害と収量に及ぼす影響及び除草効果の注意書き」を確認のうえ使用する。散布回数はいずれも1回なので、大豆の茎葉がうね間を覆う前に使用する。

(3) 畦間処理

土壌処理、茎葉処理で残草が多い場合は、畦間処理の除草剤が利用できる。ただし、大豆に薬剤が飛散しないよう、専用ノズル、カバー等を使用する。

(4) 中耕・培土

- 1回目：本葉2～3葉期 初生葉のつけ根まで軽く土寄せする。
- 2回目：本葉5～6葉期 第1本葉のつけ根まで土寄せする。

◆小麦◆

1 病害虫防除

(1) うどんこ病、赤さび病

早期発見に努め、発生初期での防除に努める。薬剤は下葉にも十分付着するように散布する。

(2) 赤かび病

開花期から乳熟期にかけて、気温が高く湿潤な天気が続くと発生が多くなる。出荷製品に混入すると、人畜に有害なかび毒（デオキシニバレノール）を生産し、下痢や嘔吐などの中毒症状を起こす場合があるため、出荷できない。防除は、開花始め～開花期に1回目、その7日後に2回目の薬剤散布を行う。

2 収穫作業

(1) ネバリゴシ

出穂後46～50日、出穂後積算温度830～950℃、子実水分25%を目安とする。

(2) キタカミコムギ

出穂後51～55日、出穂後積算温度900～1,000℃、子実水分25%を目安とする。穂発芽しやすいので、天候しだいでは水分30%での刈取りが必要になる。この場合は速やかに乾燥機に張り込み、水分25%までは送風温度を40℃以下にして品質低下を防ぐ。

農作業中の熱中症に注意しましょう

～熱中症は適切な予防をすれば防ぐことができます～

- 暑さの感じ方は人によって異なります！高齢の方は特に注意が必要です。
- まわりが協力して、熱中症予防を呼びかけ合うことが大切です。
- 天候の変化が激しい時期ですが、高温が予想される日は、熱中症予防を忘れないようご注意ください。

りんご

良果を見極め、早期適正着果で高品質果実生産に努めよう！
黒星病徹底防除推進期間中（4月～6月）、的確な防除を行おう！

ふじ（板柳町五幾形）の落花日は平年より3日早い5月15日であった。摘果は果実形質を見極めながら進め、できるだけ早い仕上げで高品質果実の生産に努める。

■ りんごの生育ステージ

板柳町五幾形 (月/日)

品種名	区分	発芽日	展葉日	開花日	満開日	落花日
ふじ	本年	3/31	4/11	5/ 4	5/ 9	5/15
	平年	4/ 8	4/18	5/ 8	5/13	5/18
	前年	3/30	4/13	5/ 5	5/11	5/16
	平年比	8日早	7日早	4日早	4日早	3日早
つがる	本年	3/31	4/15	5/ 4	5/ 8	5/14
	平年	4/ 6	4/19	5/ 7	5/12	5/17
	前年	3/27	4/18	5/ 5	5/10	5/14
	平年比	6日早	4日早	3日早	4日早	3日早
ジョナゴールド	本年	3/30	4/ 7	5/ 4	5/ 9	5/15
	平年	4/ 4	4/15	5/ 6	5/11	5/16
	前年	3/26	4/ 6	5/ 4	5/10	5/13
	平年比	5日早	8日早	2日早	2日早	1日早
王林	本年	3/30	4/ 6	4/29	5/ 7	5/12
	平年	4/ 6	4/16	5/ 5	5/11	5/16
	前年	3/28	4/11	5/ 3	5/ 9	5/13
	平年比	7日早	10日早	6日早	4日早	4日早

1 摘果

摘果が遅れると、玉伸びや果実品質、次年産の花芽形成にも影響を及ぼすので早期適正着果に努める。

なお、本年は降霜によるめしべの褐変などが見られている園地がある。霜害に遭った園地では、えき芽果や不要な果そうの摘果にとどめ、結実が確認できるようになってから仕上げ摘果を行う。障害果でも中心果の被害がごく軽微であれば、側果を残すよりは中心果を残すほうがよい。被害が著しく、着果量が不足する場合は、側果を利用するなど比較的障害の少ない果実を着果させ結実確保に努める。

■ 標準的な着果程度

品 種	摘果の強さ (残す果実)	着果率 (%)
紅玉	3頂芽に1果	33
つがる・ジョナゴールド	3.5頂芽に1果	29
ふじ・王林・早生ふじ・トキ・シナノゴールド・きおう・金星・シナノスイート・未希ライフ・ぐんま名月・さんさ・春明21・星の金貨・千雪・夏緑・恋空・祝・花祝	4頂芽に1果	25
北斗	4.5頂芽に1果	22
陸奥・世界一	5頂芽に1果	20

注) 摘果剤を散布した場合、落果は散布10日後頃から始まり、以後10～14日間続く。散布時の天候等の条件によって効果が十分に現れない場合もあるため、仕上げ摘果は遅れないように注意する。

2 ヒオモン水溶剤によるふじ・早生ふじのつる割れ防止対策

開花が早く、大玉になりやすい年や例年つる割れの多い園地では、ヒオモン水溶剤の利用も検討する。

■ ヒオモン水溶剤の使い方

品種名	使用目的	使用時期	本剤の使用回数	成分総使用回数	希釈倍数	10 a 当たり散布量	備 考
ふじ 早生ふじ	つる割れ 軽減	満開20日～ 30日後	1回	3回 以内	3,000倍	300～ 600g	展着剤不要 有効成分： 1-ナフタレン酢酸 ナトリウム 4.4%

- 注) 1 本剤は単用散布とする（展着剤は使用しない）。
 2 散布後に葉がしおれる症状(エピナスティ)を示すが、1週間後にはほぼ回復する。
 3 高温、乾燥時の散布は避ける。新梢先端葉及び樹冠内の果そう葉の黄変落葉や頂芽の欠落が発生した事例がある。
 4 極端に樹勢の弱い樹への散布は避ける。
 5 果実肥大が抑制される場合がある。
 6 新梢の二次伸長を助長する場合がある。
 7 摘果剤(ミクロデナポン水和剤85)を散布した後に本剤を使用した場合、摘果剤の効果が抑制される。

3 病虫害防除

薬剤散布に当たっては、散布量を節約せず適量を散布する。なお、散布予定日に降雨が予想される場合は前倒しで散布する。

黒星病の被害葉・被害果は見つけ次第摘み取り適正に処分する。また、感染拡大を防ぐため6月いっぱい10日間隔での薬剤散布を徹底する。

腐らん病の発生が見られている。枝腐らんは、見つけ次第切り取り、適切に処分する。胴腐らんは再発病斑も含めて、見つけ次第、泥巻き法か、削り取り法で治療する。

特産果樹

◆ぶどう◆

5月24日現在、スチューベンの開花予想は6月15日で平年より4日早い！
摘梢は適期に行い、樹勢に応じた摘心を心がけよう！

スチューベン（鶴田町境）の展葉日は5月7日で、平年より2日早かった。

1 新梢の誘引・結束

薬剤や日光の通りを良くするため、新梢は随時角度や間隔を調整しながら架線に誘引し、結束する。

2 摘心（1回目）

1回目の摘心は開花7日前頃に行い、品種や樹勢に応じて強さを調整する。

品 種	摘心部	樹勢	副梢の取り扱い
スチューベン	第1花穂 上位5枚	強・中	①すべての副梢をかき取り、その後発生した先端の副梢を1本残す ②上位1本の副梢を残し、下位はかき取る ※①か②を選択する
		弱	上位2本の副梢を残し、下位はかき取る
キャンベル・アーリー	第1花穂の 上位3～4枚		上位2本の副梢を残し、下位はかき取る
サニールージュ シャインマスカット	第1花穂の 上位5枚		上位1本の副梢を残し、下位はかき取る
ポートランド ナイアガラ	第1花穂の 上位4～5枚		上位2本の副梢を残し、下位はかき取る

3 花穂の整形

花穂整形時期は、開花5日前頃から1～2花咲き始める時が適期である。

スチューベン、ポートランド、ナイアガラでは、花穂の岐肩（通称：カタ）のみを除去する。

キャンベル・アーリーでは、花穂の岐肩、岐肩下の長い支梗や軸の間隔が広いものを除去し、さらに花穂の先端も軽く切り詰める。

シャインマスカットは、岐肩と上部支梗を除去し、花穂の先端4cmを残す。花穂整形器を利用するとハサミに比べて整形作業時間が短縮される。

4 シャインマスカットの無核栽培

シャインマスカットの無核栽培では無種子化を確実にするため、ストレプトマイシン処理を行ってからジベレリン及びフルメット処理を行う。

(1) ストレプトマイシン処理

満開予定日14日前～開花始期にストレプトマイシン200ppm溶液を花房に散布または浸漬する。

(2) ジベレリン及びフルメット処理

ア 無核3回処理の場合（ジベレリンは2回処理）

1回目は無種子化のために、満開時～満開3日後にジベレリン 25ppm 溶液に 5 ppm のフルメット液剤を加用した溶液に花房浸漬する。処理適期は、花穂先端まで咲ききったときである。

2回目は果粒肥大促進のために、満開 10～15 日後にジベレリン 25ppm 溶液に果房浸漬する。

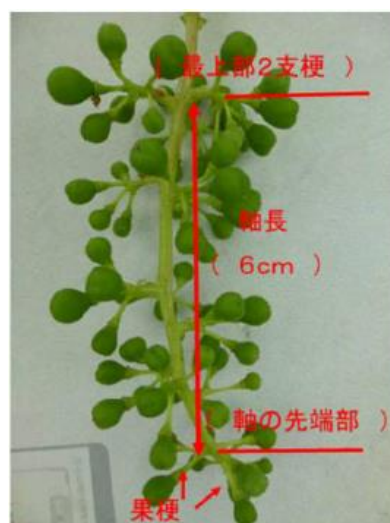
イ 無核2回処理の場合（ジベレリンは1回処理）

満開 3～5 日後（落花期）に、ジベレリン 25ppm 溶液に 10ppm のフルメット液剤を加用した溶液を花房浸漬する。

5 シャインマスカットの予備摘粒

(1) 予備摘粒

無核3回処理の2回目（ジベレリン 25ppm＋フルメット液剤 5 ppm）処理日から 5～7 日後頃に、果房の軸長を 6 cm に調整する。その際、果房の内側（軸の方向）に向けた果粒を優先して摘粒し、小粒や障害果も摘粒する。軸長は、最上部2支梗（できるだけ対になるように残す）の基部から先端部（果梗は含めない）までの長さを計測して調整する（右図）。



(2) 仕上げ摘粒

最上部2支梗の果粒は上向きも含めて各 4～5 粒残し、これ以下の支梗の果粒は果房形、果粒の配置を整えるため、外向きの果粒が等間隔となるように摘粒する。仕上げ摘粒により着粒数は 40～50 粒とする。

6 病虫害防除

■ 薬剤散布 【農薬はぶどう園以外、他の作物、近隣の住宅等に飛散させない。】

<スチューベン>

散布時期 (10a 当たり散布量)	基準薬剤名と倍数			
	殺菌剤		殺虫剤	
開花10日前 6月上旬 (250リットル)	アリエッティC水和剤	800倍	ベストガード水溶剤	1,000倍
	又はキノンドー水和剤40	600倍	又はパダンSG水溶剤	1,500倍
	又はインダーフロアブル	8,000倍	又はアグロスリン水和剤	2,000倍
	又はオンリーワンフロアブル	2,000倍	又はアディオンフロアブル	1,500倍
開花直前 6月中旬 (250リットル)	アリエッティC水和剤	800倍	ベストガード水溶剤	1,000倍
	又はゲッター水和剤	1,500倍	又はパダンSG水溶剤	1,500倍
			又はジノテフラン剤※	2,000倍
落花生後 6月下旬 (250リットル)	ロブラール水和剤	1,500倍	アグロスリン水和剤	2,000倍
	又はポリベリン水和剤	1,000倍	又はアディオンフロアブル	1,500倍
	又はスイッチ顆粒水和剤	2,000倍	又はジノテフラン剤※	2,000倍
	又はフルピカフロアブル	2,000倍		

※ジノテフラン剤：スタークル顆粒水溶剤、アルバリン顆粒水溶剤

注) 1 灰色かび病の発生が多い園地では、開花直前にゲッター水和剤を選択する。

- 2 ベと病の発生が多い園地では、開花10日前にアリエッティC水和剤又はキノンドー水和剤40、開花直前にアリエッティC水和剤を選択し、落花直後にランマンフロアブル2,000倍又はライメイフロアブル4,000倍も使用する。
- 3 黒とう病の発生が多い園地では、開花直前にアリエッティC水和剤、落花直後にポリベリン水和剤を選択する。

<シャインマスカット（露地栽培）>

散布時期 (10a当たり散布量)	基準薬剤名と倍数	
	殺菌剤	殺虫剤
新梢伸長期 (約30cm) 6月上旬 (200リットル)	ジマンダイセン水和剤 1,000倍 又はインダーフロアブル 8,000倍 又はオンリーワンフロアブル 2,000倍	
開花10日前 6月中旬 (250リットル)	アリエッティC水和剤 800倍	ベストガード水溶剤 1,000倍 又はパダンSG水溶剤 1,500倍 又はアディオフロアブル 1,500倍 又はアグロスリン水和剤 2,000倍
開花直前 6月下旬 (250リットル)	アリエッティC水和剤 800倍	ベストガード水溶剤 1,000倍 又はパダンSG水溶剤 1,500倍 又はジノテフラン剤※ 2,000倍
落花直後 7月上旬 (250リットル)	ロブラール水和剤 1,500倍	アグロスリン水和剤 2,000倍 又はアディオフロアブル 1,500倍 又はジノテフラン剤※ 2,000倍

※ジノテフラン剤：スタークル顆粒水溶剤、アルバリン顆粒水溶剤

注) ベと病の発生が多い園地では、落花直後にランマンフロアブル2,000倍又はライメイフロアブル4,000倍も使用する。

◆おとう◆

早めの摘果と適期防除で品質向上に努めよう！

佐藤錦（鶴田町菖蒲川）の満開日は4月29日で平年より6日早く、落花日は5月14日で平年より1日早かった。

1 裂果防止対策

雨よけハウスの被覆は着色した果実が見え始めた頃に行い、裂果防止に努める。

2 着色管理

(1) 葉摘み

果実の着色がある程度進んだ頃（おおむね収穫予定の7～10日前頃）から行い、果実に直接かぶさっている葉を軽く摘み取る。過度の葉摘みは果実品質を低下させたり、翌年の花芽の充実不足、樹勢の低下を招くおそれがあるので、摘み取る量は最小限にとどめる。

(2) サンキャッチ液剤 30Sの利用

着色促進のためサンキャッチ液剤 30S を利用する場合は、以下により使用する。

■ サンキャッチ液剤 30S の使用方法

対象品種	佐藤錦、南陽
処理方法	600倍液を立木全面散布
処理時期	収穫開始14日前(着色が樹全体の2～3割頃)と7日前の2回
散布量	300リットル/10a

- 注) 1 散布直後降雨は効果を減じるので、晴天日に散布する。
 2 樹冠内部が暗いと効果が劣るので、樹冠内部の明るさを適正に保つ。
 3 展着剤は不要である。
 4 他の薬剤と混用せず、単用で用いる。

3 病害虫防除

■ 薬剤散布【農薬はおうとう園以外、他の作物、近隣の住宅等に飛散させない。】

散布時期 (10a 当たり散布量)	基準薬剤名と倍数			
	殺菌剤		殺虫剤	
満開35日後 6月上旬 (500リットル)	アミスター10フロアブル	1,000倍	テルスターフロアブル	4,000倍
	又はファンタジスタ顆粒水和剤	3,000倍	又はエクシレルSE	2,500倍
	又はナリアWDG	2,000倍		
	又はアンビルフロアブル	1,000倍		
	又はオンリーワンフロアブル	2,000倍		
収穫前 【佐藤錦】 6月中～下旬 (500リットル)	アミスター10フロアブル	1,000倍	スカウトフロアブル	3,000倍
	又はナリアWDG	2,000倍	又はエクシレルSE	2,500倍
	又はインダーフロアブル	5,000倍		
収穫前 【晩生種】 7月上旬 (500リットル)	アミスター10フロアブル	1,000倍	スカウトフロアブル	3,000倍
	又はナリアWDG	2,000倍	又はテルスターフロアブル	4,000倍
			又はエクシレルSE	2,500倍

- 注) 1 満開35日後頃に、紅さやかななどの早生種に散布する場合、収穫前日数に注意して薬剤を選択する。
 2 カメムシ類対策では、満開35日後や収穫前に発生がみられた場合は、テルスターフロアブルを選択する。
 3 収穫前にオウトウショウジョウバエ対策でスカウトフロアブルを使用するとカメムシ類防除剤は必要ない。
 4 アンビルフロアブル、オンリーワンフロアブル、インダーフロアブルは、薬剤耐性の懸念があるので連続使用しない
 5 アミスター10フロアブル、ファンタジスタ顆粒水和剤、ナリアWDGは、薬剤耐性の懸念があるので、合わせて年2回以内の使用とする。ただし、アミスター10フロアブルとファンタジスタ顆粒水和剤は連続使用しない。

4 収穫

収穫は満開日からの日数が目安になるが、天候によっては早まることもあるので、品種の特性（着色、大きさ、形状、食味など）を重視し、成熟したものから順次、数回にわたって行う。

■ 各品種の収穫期

品 種	満開日から収穫日までの日数
紅さやか	40～50日
佐藤錦	50～55日
ジュノハート	55～60日
紅秀峰	60～70日
サミット	60～65日
南陽	60～65日

野菜

草勢に応じた肥培管理やこまめな温度管理を行い、計画的に作業をすすめよう！

◆トマト◆

1 温度管理

ハウスの温度は昼間 25℃前後で管理する。天候により高温障害が発生しないよう、サイド換気や肩換気を行う。

気温が低い日や夜間はサイドを閉め、保温に努めるが、6月中旬以降、最低気温が 14℃以上になれば、夜間もサイドを開放する。

2 着果促進

1～4段花房は4番花開花始め、5段花房以降は3～4番花開花始めにトマトトーン処理をする。処理はなるべく気温が高温にならない午前中の時間帯に行う。

3 かん水・追肥

本格的なかん水・追肥は、3段花房の開花期から行う。

かん水量は1株当たり 1.5 リットルを基準とする。28℃以上の気温が予想される日は、1株当たり 2 リットルとする。2本仕立ての場合は、側枝1本を1株とする。かん水間隔は天候状態をみながら調整する。

1回当たりの追肥量は、窒素成分 0.5kg/10a 以内とする。10日間の窒素成分の合計は 1.5～2.5kg/10a を目安とするが、天候状態や草勢に応じて調整する。

<かん水と追肥量の目安>

月	旬	かん水量/1株当	かん水間隔	10日間の窒素成分合計
6	上	1.5リットル	1～2日おき	1.5～2.0kg/10a
	中～下	1.5～2.0リットル	毎日～1日おき	2.0～2.5kg/10a

4 摘果

3段花房トマトトーン処理後に、1段果房を一斉に摘果する。奇数段は3果、偶数段は4果になるよう摘果する。草勢が極端に弱い場合は、2段花房トマトトーン処理後1～2果程度に着果を制限する。

5 葉面散布

草勢の維持（葉先枯れ、ガク枯れ、着果不良軽減）のため、3段開花以降、メリット黄 400倍を各段2～3日おきに2回、開花花房を中心に葉面散布する。

6 病虫害防除

灰色かび病が発生しやすくなるので、葉先枯れ部分や花カスをできるだけ取り除くとともに、ハウス内の換気や薬剤による予防防除を行う。

アザミウマ類の発生が多くなるので、ほ場周辺の除草を行い、発生状況に応じて早期に防除を行う。

◆メロン◆

1 温度管理

定植後は最高気温28～30℃、開花期は最低気温12～15℃を目安に、トンネルの開閉などでこまめな温度・湿度管理を行う。特に夜間の閉めきりは軟弱徒長となり、病虫害の発生の原因となるので、こまめな開閉を心がける。（外気の最低気温15℃以上なら夜間開放）

2 かん水

開花期のかん水は、湿度の上昇により花粉が出にくくなるので控える。

着果確認後（鶏卵大の頃）から着果2週間後頃までかん水を行う。1回の量は、株当たり4リットルが目安となるが、土壌水分により加減する。

草勢（つる先の立ち上がり、葉色、孫づるの伸長）を見て、液肥や葉面散布を行う。

3 摘心と整枝

(1) 結果枝（孫づる）の摘心

ア 弱勢の場合 着果節位を1～2節上げ、着果確認後に、孫づるの葉1枚を残し、摘心する。

イ 適勢の場合 開花前後に孫づるの葉1枚を残し摘心する。

ウ 強勢の場合 開花予定日の3～4日前に孫づるの葉1枚を残し、摘心する。

(2) 結果枝以外の整枝

22～23節で子づるを摘心する。15～20節の孫づるを除去する。

整枝は着果後10日までに終了し、風通しを良くし、ネットの形成を促進する。

果実肥大期は、受光体勢を維持するため、茎・葉を動かさないようにする。

5～8月は「農薬危害防止運動」実施期間です

農薬の適正使用と隣接農地への飛散防止に十分気をつけましょう

- 使用し残った農薬などは、河川等へ絶対捨てないでください。
- 農薬を使用する場合には、必ず最新の「農薬登録情報」を確認してください。
- 農薬は鍵のかかる専用の場所に保管し、管理を徹底しましょう。

花き

適正な温度管理により高品質な花きの生産に努めよう！

◆キク◆

1 定植前後の管理

採穂に当たっては、病害虫に侵されておらず、太さが揃い充実したものを選択し、定植2週間前から挿し芽を行う。10月出荷の作型は、6月上旬～下旬に定植できるように作業を進める。

挿し芽後は十分かん水する。5月以降の日射が強い時期は、遮光率50%程度の資材を発根まで被覆して日中のしおれを防ぐ。

定植後の管理について、花芽分化期までにいかに草丈を伸ばすかが、良品質切り花生産にとって重要であるので、定植後40日くらいは十分にかん水する。なお、温度は、日中25℃、夜間15℃を目標に管理する。

2 病害虫防除

白さび病、アブラムシ類、アザミウマ類及びハモグリバエ類が発生する時期なので、過湿や多肥を避け、早期発見・早期防除に努める。また、オオタバコガやヨトウムシ類の侵入を防ぐため、ハウスのサイドや出入口等に防虫ネットを早めに設置する。

◆トルコギキョウ◆

1 定植作業

10月出荷の作型では、6月下旬頃までに定植する。老化苗は生育が劣るので、本葉が4枚展開までのものを使用する。

高温時の定植では、定植1週間前から遮光率40%程度の遮光資材を用いて地温を下げ、活着を確認したら曇天または夕方に被覆資材を除去する。

定植は深植えとせず、株元を強く押さえないようにする。

2 定植後の管理

気温25℃以上が続くと生育の停滞やロゼットの要因となるので、遮光や換気等で温度管理を徹底し、発蕾までは乾燥させないように管理する。

分枝が低節位から発生した場合は、主茎促進のため、5節まで（草丈15cmまで）のものを早めに摘み取る。

3 病害虫防除

上記キクを参照